

フレッシュ研修「授業力アップ」

2010年8月28日(土)

関西外国語大学の中嶋洋一先生を講師としてお招きし、朱雀キャンパス308教室にて「授業力アップ」をテーマにフレッシュ研修を実施した。各校から17名のフレッシュ研修対象教員が参加した。

今回の研修は、「ストップ・モーション方式の授業研究」を実施。これは、あらかじめ録画した授業を途中で停止し、その都度、研究協議していくもので。切りの良いところで止めて話し合う。疑問に感じたことや知りたいことが出てきたら停止して話し合う。一つ一つの活動が全体の流れとつながっているのかどうかを各々の視点から確認していくことができる。3Dは「教師を見る」「生徒を見る」「教師の信念を見つける」という3つの視点を意味し、参加者がこの3つのグループに分かれてそれぞれの視点から分析を進めていくという形式で実施された。

授業は、大阪の中学校、5年目の女性教諭で中学1年生、3回目の家庭科の授業を録画したものを取り上げた。授業開始時に挨拶、そのとき、座席を入れ替わっている生徒に元に戻るよう指示、当然のことであるが、その場で対応することが重要である。また、授業中に一言も「静かにしなさい。」とは言わない。声の大きさを生徒たちをコントロールしているところが評価として



あげられた。授業中によくある場面であるが、プリント配布をするときに、グループと人数がわかっているのだから予めプリントを分けておいて配布するということが必要である。こうすれば授業中の無駄な時間がなくなる。机間巡視では、先生が生徒を褒めている、生徒の声から「拾うべき意見

と流す意見を区別している。」この点も重要である。あくびをしている生徒には、授業の雰囲気をごわさないように「目で注意」している。基本的なことであるが、日頃できているかどうか教師としてチェックすることが大切である。

生徒たちに予想をさせ、考えさせる、気づきを待つ、子どもに意見を持たせて活動させる。そして検証させる。大事なことは、授業を展開するにあたり、この時間にすべき内容を明確に示すこと。授業で全員が到達すべきところはどこなのかを明確にする。できた生徒には次の課題を与える。できていない生徒は戻って取り組ませる。本当に理解できたかどうかは生徒に出力させること。授業の終わり5分は問題を作らせたりしてアウトプットさせる。定期考査まで待っているのは遅いので毎時間チェックすること、とポイントを話された。

その後、それぞれチェックしたポイントについて話し合いが行われ、お互いに気づいたこと、気づかなかったことを確認し、発表をおこなった。

参加教員からは、教師になって日も浅く、今の授業力、指導力でのよいかと悩んでいたところでした。2時間半は短く感じられて生徒たちにこのような気持ちで授業に参加して欲しいと思いました。まずは授業案をしっかり練るところから始めたいと考えています、との感想があり、先生方の意欲を引き出せる研修になった。



立命館附属校合同研修会

2010年9月11日(土)

立命館小学校を会場に附属校合同研修会を開催した。今回は、立命館小学校の授業を附属校の先生方に参観いただき、立命館が取り組んでいる先進的教育システムである小学校から中学校・高等学校への12年間を4-4-4として展開する様子について理解を深めていただくことを目標とし、213名の附属校教員が集まって実施された。

朝のモジュールタイムは百マス計算・英語・音読に取り組み、児童たちが生き生きと取り組んでいる姿が印象的であった。公開授業は14名の先生に実施していただいた。

■ 全体会 I

立命館学園一貫教育担当・上野隆三常務理事のご挨拶のあと、立命館小学校の教育紹介を浮田恭子校長から、立命館中学校・高等学校の新しい展開について文田明良副校長からお話いただき、附属校教員が共通の認識として立命館小中高の接続と取り組みについて理解を深めることができた。

■ 分科会

教科ごとに9つの分科会を開催、司会進行と記録を小学校の先生にお願いした。今回は時間の制約があったが、どの分科会も終了時間まで熱心な意見交換がした。特に算数では、計算間違いをした場合、全部を消



してしまう子どもがいること。どこで躓いたかを確認する意味でも消さずに点検していくことや、教師がどの児童を見て欲しいかを事前に知らせること、あるいは、授業の中で何を主題にするかを考え、その授業のゴールを明確にすること、などのアドバイスがあった。

■ 全体会 II

講師として早稲田大学教育学部の安彦忠彦教授をお招きした。主な講演内容は次の通り。

はじめに、小中一貫教育の可能性の増大について触れられました。そして、データをもとに分析をすると、子どもたちの発達に精神的にも身体的にも2年程度早まっている。アメリカでの5-3-4制と日本の小中一貫の事例を比較、その中で日本の小6と中1の接続を2年間では不十分と指摘され、小学校の高学年を後期初等教育=前期中等教育と位置づけ個人差や個性に応じる指導が必要であり、具体的に小中の9年を4-3-2制、4-5制、など、そして高校まで含めて4-4-4制が望ましいとまとめられました。立命館での新たな取り組みに活力と勇気が生まれる内容の講演であった。



P1	新しい科学教育を目指して SSH9年間の取り組みー
P2	高大接続教育の到達点と課題
P3	第Ⅲ期SSH研究開発について スーパーサイエンスハイスクール (SSH)事業の現状
P4-P7	立命館コースの特色ある取り組み
P8	フレッシュ研修「授業力アップ」 立命館附属校合同研修会



新しい科学教育を目指して SSH9年間の取り組みー

Tanaka Hiroshi

田中 博 立命館中学校・高等学校 校長

2010年度から5年間のスーパーサイエンスハイスクール (SSH) 指定を受けることができました。2002年度から3年間の第Ⅰ期、2005年度から5年間の第Ⅱ期に続いて第Ⅲ期目となる指定です。

21世紀を迎えた2001年、新年が明けて最初の教員会議冒頭にて、当時の校長が「21世紀前半に本校出身のノーベル賞学者を輩出したい」と語られました。若い理科や数学の先生がそれに触発され、サイエンス教育を軸として、文理拘わらずすべての生徒達に科学の眼を養えるような教育を描けないかと考え始めました。また、開設間もないBKCキャンパスの素晴らしさに圧倒され、ここへ高校生を連れてきて新しい教育を探りたいと夢を描きました。校内ではもちろん、大学とも様々な議論をし、BKCに高等学校専用施設を建築し、そこで高大連携教育を行おうと決定した2001年秋に文部科学省からSSH構想が発表され、その構想の中で私達の思いを実現しようとして初年度に申請を行い、無事指定を受けることができました。指定初年度には大学の先生方とネットワークを作るために、BKCを動きまわり、多くの先生からアドバイスをいただき、翌年2003年度から生徒が週2日間BKCで学習するスーパーサイエンスプログラム (SSP) がスタートしました。

その後、大きな転機が訪れます。私達のBKC展開とほぼ時期を同じくし、オーストラリアのアデレードでフリンダース大学内に Australian

Science and Mathematics School (ASMS) という科学高校が誕生し、その学校を訪問できる機会が得られました。訪問の際に、本校のSSH事業の一環として、早稲田大学本庄高等学院と生徒の研究発表会を企画しているという話にASMSの先生が興味を示され、その場におられた教育省の方に立命館へ生徒を派遣したいと交渉され、了解を得られました。生徒の研究発表会に海外から生徒が来るということで大きな緊張をしながら、来校を待ちました。このような経緯からたった3校で始めた Science Fair ですが、そのことが本校のそれまでに交流していた学校、ASMSの交流している学校等で話題となり、みるみるうちに大きなFairへと膨れ上がっていきました。最初の2年ほどは、私自信が科学教育と英語教育を切り離して考えており、お互いの研究を交流することが大切でそのためには通訳をつけなければいくらかの認識でしたが、海外校との交流においては、科学研究の交流から得られるものだけでなく、海外生徒が持っている科学学習への使命感や国を越えた協働の姿勢を養わせることの方がむしろ大切であるということに認識するようになりました。そのためには、生徒達の英語運用能力を上げ、より密接な交流を促進していくことが大切と思うようになりました。海外の Science Fairへ出かけた際の生徒の立ち振る舞いが生徒の成長に大きな刺激となることも目の当たりにしてきました。生徒達を一流の科学者や技術者に成長させるために

は、高校生の時期から国際交流の中で成長させていくことが大切であると確信を持ち始めました。科学教育の課題は多くありますが、国際化の課題はその中の一つとして真正面から研究する必要があると強く感じています。

Rits Super Science Fairが今年8回目を迎えましたが、6回目以降は海外から30校ほどの参加を得ています。一度参加した学校は毎年リピーターとして参加を希望され、科学研究発表を題材にした国際交流の場が毎年本校で開催されることは、海外参加校にとっても意義深く、このFairへの参加を年間計画に盛り込んでくれています。Fairをきっかけに海外のトップ科学学校と言われるような学校7校と交流提携を結ぶこともできました。Fairで得られたネットワークが立命館大学の国際化へ貢献することも徐々に広がってきています。

第Ⅲ期においては、これまでの取り組みをより高度に発展させ、科学教育の国際化拠点として、日本の高等学校科学教育の国際化に貢献できる存在になればと願っています。



高大接続教育の到達点と課題

立命館守山高等学校が、2006年度から展開しているスーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業も早や5年が経過し、最終年度を終えようとしています。この間、二つのSSH研究開発課題を設定し、全校を挙げて本事業を推進してきましたが、その一つが、「アドバンスト・プレイスメント(AP)科目」による高大連携教育と高大接続の新たなモデル創出でした。

本校では、2年次まで全員共通の理数重視型カリキュラムを履修させ、3年次からはAP科目を集中的に受講できるようにしています。この編成により、文系・理系を問わず全ての生徒に理数系教育を充実させるとともに、高大接続教育を積極的に推進しています。

例えば、2010年度の3年生の履修状況を見ると、6クラス中3クラスが理系選択を行っています。また、附属校生に開講されているAP科目(生徒の興味関心にあわせて、理工学部18科目、情報理工学部11科目、生命科学部・薬学部9科目、経済学部、法学部各1科目より選択)についても、58名の生徒が科目等履修生としてBKC、朱雀、守山キャンパスで受講しました。

これらの成果をもとに、2011年度からは、ゼミ形式のAP科目「理工ゼミナール」が開講されます。大学生と共にテーマに関する調査・研究・発表等を行う、双方向性・相互啓発性の講座への期待が、受講希望者たちの間に高まっています。

本校では、このようなAP科目を受講した生徒たちが、大学入学後に教育研究活動の核となって活躍することを期待しています。既に、AP科目を受講した卒業生は、大学でも高いモチベーションを発揮し、好成績を挙げています。高校のAP科目成績と大学のGPAとの相関性は高く、AP科目開講の効果はデータ上でも明らかになっています。

今後は、AP科目を受講する意欲的な生徒をさらに増やしたいと考えています。そのためには、高校段階で基礎的なスキルや基本的な知識・概念をしっかり習得させ、同時に大学の教育研究にも触れてさせることで、高い学びを先取りしたいという動機付けを図ることが重要です。大学でのより高い学びを見据え、AP科目受講生のレベルとボリュームをさらに上げていくことが、本校のこれからの課題です。



立命館守山中学校・高等学校 校長 小島 敏夫



第Ⅲ期SSH研究開発について

立命館高等学校SSH推進機構

第Ⅰ期、第Ⅱ期の8年間のSSH研究開発を通し、地球や人類のために科学が果たす役割が益々増えていくと実感しています。これら社会貢献のための科学には「高い学力や幅広い経験」「学んだことを発信し応用する力」「科学を社会へ役立てる使命感」を育てることが大切であると考えます。国際的な科学教育を切り口としてこれらの教育をシステム化したいと考えます。国際舞台で活躍する科学者育成のための教育システムを研究し、同時に優秀な科学者、技術者の輩出を目標としていきたいと考え、研究開発課題を「国際舞台で活躍する科学者への素養を育てる教育システムの研究開発」とし、具体的には、以下の項目について研究を行うこととしています。

- (I) 科学への知識、感性を広げ社会的使命感を養うための研究
- (II) 国際舞台に必要な科学コミュニケーション能力の育成のための研究
- (III) 将来の活動に向けての国際ネットワークを築くための研究

(I)に関しては、国際的な視点で捉えなければならない問題について、高校生の立場で取り組むことで、生徒の社会的使命感を養いたいと考えています。立命館大学、とりわけ、持続可能な社会を目指した先端科学を研究テーマとされているR-GIROとの連携により、有効な研究テーマや方法を見出したいと考えています。

(II)に関しては、日本の多くの学校で必要としている、科学コミュニケーション能力を育成するための段階的指導法を確立し、テキスト化したいと考えています。

(III)に関しては、これまで本校で発展してきたRits Super Science Fair等の取り組みをより高度に発展させ、将来に向けての国際ネットワークを構築し、日本の多くの高校生にその場を提供したいと考えています。



■ スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業の現状

科学技術創造立国「日本」を支える新しい科学教育の研究開発を目的に、2002年度から文部科学省によってスーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業が始められた。初年度は全国26校が指定を受け3年間の研究開発が行われたが、4年目からは5年間の指定となった。指定校は年々増加しており、今年度は125校が指定を受けている。指定校は、国から研究開発のための補助金が支給されるとともに、教育課程において研究開発上で必要となる特例を認められる。草創期には、各校が独自に様々な科学教育を創り出していこうという雰囲気であったが、第Ⅱ期に入った2005年頃からは、「大学等との連携教育」、「科学教育の国際化」が大きな柱としてクローズアップされ、さらに、教育課程の研究開発だけでなく人材育成にも力が注がれることとなった。2006年度には立命館山高等学校も指定を受け、次年度2011年度から第Ⅱ期指定に向けて現在申請を行っている。同時に立命館慶祥高等学校においても、次年度からの指定に向けて申請中である。

2006年度から一般のSSHでの補助金を縮小し、新たに特別枠研究という形で選考を受けて追加の補助を行うよう変更された。その後、重点枠(2008年度)、中核的拠点育成プログラム(2009年度)と形態が若干変更され、2010年度からはコアSSHというプ

ログラムとなった。そこでは、「地域の中核的拠点形成」「全国的な規模での共同研究(コンソーシアム型)」「海外の理数教育重点校との連携」「教員連携」のジャンルがあり、コアSSH校を中心にSSHでの成果を多くの学校へ普及させよう」と図られている。立命館高等学校においては、2006年度、2007年度特別枠、2008年度重点枠の指定を受け、2011年度に向けては、コアSSH「海外の理数教育重点校との連携」へ申請している。

SSH校は、毎年、研究開発の成果報告書を提出すること、事例研究として科学技術振興機構(JST)のHP上に特徴的な取り組みにおける評価を逐次報告すること、夏に行われるSSH生徒研究発表会において生徒発表を行うこと等が義務付けら

れており、また、得られた成果を普及させるため、他の学校でも使えるテキスト開発や近隣の小・中学、高校での科学研究の啓蒙活動、教員研修会の開催等が重視されている。(一貫教育部)



立命館コースの特色ある取り組み



平安女学院中学校・高等学校



育英西中学校・高等学校

平安女学院中学校・高等学校

京都から、女子の国際人材育成をめざして

▶立命館コースの特色ある取り組み

立命館コース 高2担任 かど よしえ 角 好恵

平安女学院高校での高大連携講座は、「文学部との連携講座」で2009年度に開始しました。2年次のテーマは御所の木々が見える場所にある本校の位置・歴史もふまえて「京都学」を設定しました。

座学とフィールドワークを組み合わせ、「百人一首・源氏物語」の講義のあとは、風俗博物館・時雨殿などへ。五条坂の登り窯の見学、「漢詩文を通して考える日本文化」の講義の前には相国寺承天閣美術館へ。「現代京都の原風景」の講義後には、本校のそばにある強制疎開跡地をいくつも巡り、堀川通りの戦中・戦後の歴史を肌で感じました。中古から現代にわたる京都の歴史を学べる場所へでかけていくことができるのが本校の強みです。3年次のテーマは3週間の海外語学研修を視野に入れて「国際理解」へ。2年間の総まとめとして3年生は5000字の小論文を書き、2年生の前で発表。アカデミックプログラムの受講・ゼミナール大会の聴講が生かされたテーマの多様性、発表の工夫が成果として実を結びました。



▶立命館コースへの期待と展望

いましはくすみお 校長 今宿 純男〈立命館大学教育開発推進機構教授〉

平安女学院中学校・高等学校立命館コースの一期生が卒業を迎えることとなりました。今日まで準備段階を含め足かけ4年、この間、紆余曲折・甲論乙駁の場面にも遭遇しましたが、何よりも生徒にとっての“学び”を最重点課題と位置づけ、コース担当者は、誠心誠意・粉骨砕身の姿勢でもって取り組んできました。立命館、一貫教育部、本学院の緻密かつスムーズな連携体制の下、目標以上の成果を上げることが出来たのではないかと自負しています。

今回の成果を次年度以降も継続させるため、コース体制の一層の充実を図りたいと思います。



「京都学」でのフィールドワーク



文学部との高大連携講座

2008年よりスタートした提携校(接続コース)1期生が、いよいよ2011年4月、立命館大学および立命館アジア太平洋大学に入学します。

今回の特集では、各提携校と立命館大学・立命館アジア太平洋大学との教育連携の取り組みを特集し、各提携校の「立命館コース」「APU・立命館コース」における特色ある教育プログラムや企画・取り組みについてご紹介いたします。



岩田中学校・高等学校



初芝立命館中学校・高等学校



初芝橋本中学校・高等学校

育英西中学校・高等学校

次世代を担う女子の理系人材育成

▶立命館コースの特色ある取り組み

立命館コース主任 やまね けんじ 山根 建二

立命館コースでは大学と連携して様々な取り組みを行っています。年間でその数は20余りにも及び、全てを紹介することはできませんが、代表的なものを取り上げてみます。生徒は入学後まもなく、大学を訪れ(「BKC訪問」)、大学の教職員や学生から話を聞き、施設見学などを行います。6月には高校1,2年生を対象に「理系学部学び紹介」を催します。理系学部の学生が研究内容をわかりやすく発表し、また、少人数に分かれての座談会等も行い、学生生活についても話が及びます。大学の先生方の特別講義も各学年で年に数回ずつ行っています。1年生は生物特別講義、2年生は物理特別講義、3年生は情報特別講義などですが、その他にも、理工学部や経済学部の特別講義など様々です。また、高校3年生では本校特別設置科目SD (Science & Discovery) の授業において、生徒の実験研究の補助として、約10名の大学院生が毎週手伝いに来てくれます。生徒たちはこのように、教科書では学べない様々な学習の機会を通して理科への興味を深めています。



▶立命館コースへの期待と展望

校長 あまたに まさこ 天谷 雅子

生徒の大学進学後やその後を期待感とともに具体的にイメージし、また中学高校の役割を自覚しながら教育活動が展開できる連携の利点を感じています。時代の先端やグローバルな世界観に直接触れる教育環境の中で、次世代を担える理系女子人材を育成することが願いです。感受性の高い青年期ならではの吸収力と行動力は、知的好奇心が生まれ、目標となる優れた先達者と接する環境においてこそ見事に発揮されることを、証明していきたいものです。



理工学部の特別講義



BKC訪問



SD (Science & Discovery) 授業で
大学院生の補助

初芝橋本中学校・高等学校

地域に根ざし、 現代の諸課題に取り組む

▶ 立命館コースの特色ある取り組み

立命館コース 高2担任 はまだ よしはる 浜田 宣治

本校立命館コースでは教科の枠を超えた“現代的な課題”に取り組むCP(Connecting Program)を高校2年次より展開しています。このCPでは『地球温暖化について考える』をテーマに発表・討論などを積極的に取り入れた授業スタイルをとっています。2010年7月には政策科学部の仲上健一先生に「地球温暖化対策と政策科学」、11月には理工学部の天野耕二先生に「ライフサイクルアセスメント(LCA)で考える地球温暖化対策」のテーマで講義して頂き、ディスカッションも行いました。高校3年次には個々の生徒が「地球温暖化に対する私の提言」を行います。

「成熟社会を達成した日本に、もはや万人に共通する正解などない。この時代だからこそ“正解のない問題”にアプローチできる基礎学力を養成し、コミュニケーション能力を高め、教養のある人材を育成する。」をモットーに生徒と共に取り組んでいます。



立命館大学教授による講義



「CP」授業

岩田中学校・高等学校

APUとの連携によるグローバル人材の育成

▶ 立命館コースの特色ある取り組み

APU・立命館コース 高2担任 さかがみ あつし 坂上 敦志

本校の連携教育プログラムである「APU・立命館コース」の特色は、『言語スキルの形成』と『大学教育への接続』の2つが大きな柱となっています。『言語スキルの形成』は、充実した英語教育に加え、TOEFL対策授業を行っています。また、高校1年では韓国語やマレー語などのアジア言語を、高校2年からは中国語をそれぞれ週2時間行っています。『大学教育への接続』は高校1年、高校2年で「APU講座」という授業を設け、APU教授の指導のもと、留学生を含むAPU生とのグループワークが行われます。クラスメートと協力しながら日常生活と世界のつながりに関して、自らの力で考え、調べ、表現することを学び、この勉強の成果は、年に2回『岩田生プレゼン大会』としてAPUで発表します。高校3年では、週に2日APUで大学の講義を受け、最高16単位の取得が可能となります。どの講座も生徒は意欲的に取り組み、はつらつとした高校生活を送っています。



▶ 立命館コースへの期待と展望

いたくら たかよし 校長 板倉 孝義

社会に貢献する高い志を有し、文化・芸術を愛する豊かな感性と高潔と気品に満ちた「世界基準の人材」を大分の地から育成することを目指したこのコースができて3年がたちます。九州では初めての本格的な高大連携プログラムを実践し、試行錯誤の中から、我々は多くのものを学びました。そしてこの春、初めての卒業生が本校を巣立っていきます。受験を意識しない国際教育や人間教育の特色をもったこのコースの評価は、卒業生が大学でどのような活躍をするかにかかっています。卒業生には、我々の期待に応えるべく、今後のさらなる活躍を期待します。



APUで行われる年2回のプレゼンテーション大会
(高校1・2年)



シンガポール・マレーシア語学研修
(高校2年)

▶立命館コースへの期待と展望

校長 上里 昌輝

平成23年の開校20周年を目前にした平成10年代後半、初芝橋本は中・高とも、地域社会の多様なニーズに応えられる学校として発展するため、これまでのあり方を分析し将来に向け検証すべき時期を迎えていました。

平成20年度の学校法人立命館との教学提携により、初芝橋本中学校高等学校に新たな可能性がもたらされると期待しております。今後、あらゆる交流を通じ、立命館コースを軸として、ともに生徒・保護者のより高い要望に応えられる学校づくりに邁進できることを望みます。



2010年度卒業生

立命館コース・APU立命館コース 学部進学結果

立命館大学	平安女学院	育英西	岩田
法学部	2	3	1
産業社会学部	2	2	1
国際関係学部	1	1	1
政策科学部	1	1	1
文学部	9	3	
映像学部	1		
経済学部	3		
経営学部	4	3	1
スポーツ健康科学部	1	1	
理工学部		8	
情報理工学部		3	
生命科学部		5	
薬学部		2	

立命館アジア太平洋大学	平安女学院	育英西	岩田
アジア太平洋学部	1		8
国際経営学部			4

初芝立命館中学校・高等学校

「世界に通用する十八歳」の育成

▶立命館コースの特色ある取り組み

立命館コース 高2担任 北 宏志

現在高校1・2年生239名が立命館コースで学んでいます。本校では、接続校としての特色化を図るために様々な取り組みをしています。

BKCでの研修やAPU訪問など大学進学への意欲を高める行事や、立命館大学教職員を招いて講演会を定期的に設けています。総合的な学習の時間を「地球市民科」と設定し、大学のみならず企業やNPO法人、新聞社などと連携授業を実施し、自ら知識を追求する力の向上に努めています。本年度より「何もなくて豊かな南の島」といわれるカオハガン島に滞在し、フェアトレードを学ぶフィリピンコース/砂漠に植林をし、環境について考える中国コース/世界唯一の分断国家の最前線である板門店を訪れ、平和について考える韓国コースの3コースに分かれての海外修学旅行もスタートし、広い視野で考え、進んで行動を起こせる人材を育成していきたいとも考えています。また、学習到達度検証試験の基準を全員が到達できる学力を身につけるために、早朝テストや学生による自習支援のRSプログラム、長期休業中の勉強合宿やスクーリングゼミにも取り組んでいます。

一貫教育の高度化を進められるよう、教職員が一丸となり教育づくりを進めていきたいと考えています。



▶立命館コースへの期待と展望

校長 竹中 宏文

初芝立命館中学校・高等学校では、校名変更を行い、中高ともに立命館コースがスタートして2年がたちました。従来の附属校や、他の提携校ではこれまで行っていないような、多くの生徒が立命館コースでの一貫教育を受ける「接続校」として、さまざまな新しい試みに取り組んでいます。

初芝が70年を超えて大切にしてきた、丁寧できめ細やかな指導により社会で自立する人間を育てる教育の伝統を大切にしつつ、さらに、真にこの国際化著しい社会に必要な学力を身につけ、心身を鍛え、世界で活躍できる基礎力を持った生徒を育てようとしています。



BKC研修



高大連携キャリア教育